

中国人日本語学習者における『断り』表現の問題点	
文 鐘蓮	比較社会文化学専攻
期間	2006年8月14日～2006年8月25日
場所	中華人民共和国
施設	大連外国語大学、大連大学、北京大学、北京科技大学、遼寧大学、中国医科大学

内容報告

人々は言語を用いてコミュニケーションの目的を達成させようとしているが、様々な場面や相手人物、用件などといった要素によって、話し手はその場に適切な言語手段及び方略を講じなければ理想的なコミュニケーションの成果は覚束なくなる。このような言語手段及び方略の選択は、語彙や文法といった言語知識だけに依存するのではなく、更に大切なのは特定の場面及び相手人物に対する効果的な言語運用能力の使用法である。言語運用能力は言語行動の成功に関わる最も重要な要素であると考えられる。

1. 研究の背景及び目的

1.1 研究の背景

人間は社会的構成要員として、諸行為をもって日々の社会活動を行っている。社会という集団生活を営んでいる我々は独立した存在ではないため、常に「依頼」、「誘い」、「提案」などといった行動をとらなければならないし、また場合によっては「依頼」や「誘い」、「提案」などといった相手の要請を断らなければならない状況にも直面する。このような言語行動を指揮するのは言葉なのである。言葉というのは、自分の意思を他人に伝えたり、コミュニケーション行動を行ったりする時に使用される道具で、コミュニケーションのなかだちになる言葉遣いや表現の選択如何によって、相手に伝わる感覚や印象などは全く異なることになる。

森山 (2003:137) は、「断り」行為は相手の要望や好意が示されたのにも関わらず、それを拒否し、相手の意図を打ち砕くということになるので、相手に不快感を与える行為になり、対人関係上の「障害」が生じないように配慮しながら、言語行動を講ずることになると述べている。「断り」行為は適切さを欠くとき、両者間の人間関係は危険性をもつことにもなりかねない。如何にして「断り」表現をするかということは、人間関

係を保全するのに大変重要なことだと考えられる。

日常の言語行動で、人々は他人を傷つけないという立場から、丁寧さを重要視した、秩序の守られた原則の枠内でお互いに適切な発話をするつもりでありながら、言語文化による発話内容の多彩さや発話行為の多様性により、自分も知らないうちにお互いの期待に添えなかったり、誤解したり、当惑を感じたりすることが良く発生するのである。「人間はどのように言語を用いて他人とのコミュニケーションを成立させるのか」という発話行為をめぐる、語用論、言語行為の研究、談話分析や会話分析といった多角的な観点から言語行動に関する様々な研究が現れてきた。1960年代には言語能力と言語運用能力の区別が提唱され、人間のコミュニケーション運用能力というのは、文法的に正しい文を作る言語知識だけでは不十分であり、様々な目的や場面、社会的な要素に適応した社会的言語能力が主張されてきた。

橋本 (1992:108) は、異文化コミュニケーションを行う時生じる互いの意思疎通の不都合をきたす原因は様々あるが、主な原因は2つある。1つは言葉の意味的側面の不理解によることであり、これは齟齬の原因が明確なことで、相手国の言語を習熟することによってその障害を乗り越えることができる。もう1つは異文化コミュニケーション研究で、従来、あまり注意が払われなかったものに、コミュニケーション・ルールの相違による誤解があり、その最もたるものが語用論的言語運用規則の違いであると述べている。

高田 (1993:14-15) によると、言語の研究は意味論（構文論）と語用論の2つの研究があり、前者は語の概念的な意味や文を構成する構文的な規則、または文の示す構文的な意味といった言語の世界そのものを研究しようとする、長く言語研究の中心をなしてきた分野であり、後者は言語がそれぞれの場面で用いられる

際のような状況と言語との関わりとを研究する比較的新しい分野であるという。本研究での「断り」表現の研究は高田(1993)が指摘している語用論研究の範囲内に入ると考えられる。

近年、在日中国人留学生の急激な増加により、日本語教育の立場から中国人日本語学習者と日本語母語話者とのギャップを取り上げた言語行動の研究は大変進んでいるというものの、それは主に「依頼」や「誘い」、「提案」などといった限られた分野に留まっており、「断り」表現のような人間関係における危険性の高い言語行動の先行研究は馬場・禹(1994)や李(1999)しかないのが現実なのである。

1.2 本研究の目的

日常の様々な言語行動の中で「断り」行為は相手の期待に添えないため、他の言語行動より相手に不快感を与えやすい危険性の最も高い行為になり、対人関係上の「障害」が生じないように配慮しながら「断り」行為をしなければいけない。「断り」行為は適切さを欠くとき、両者間の人間関係は危険性をもつことにもなりかねない。各々の社会・文化には、その社会固有の人間関係の捉え方や、相手への配慮の仕方があるはずである。

日本と中国は一衣帯水の隣国で、両国の間には長い友好的な往来があったため、文化、言語、歴史などといった様々な面で共通しているところがある。しかし、異なった地理的環境及びその国独特な政治的体制や文化的背景のもとで、日本と中国は各自独特な文化を作り上げてきたため、日中両言語には同じ言語表現もあれば異なる言語表現も多くある。円滑なコミュニケーションを目指すためには、文法的に正しい文を作ることだけでは不十分であり、その言語における談話レベルの語用論的知識が不可欠ことになる。ゆえに、言語形式の語用論的運用能力と適切な言語表現の選択の使用はコミュニケーションの成功に関わる重要な要素だと考えられる。

日本語には様々な相手人物や場面に適応できる敬語表現という言語の仕組みがあるため、異なる相手人物に自分の意思を伝えるのに大変便利な仕組みがあるが、中国語には日本語のような敬語体系がないのである。

本研究では語用論な視点から、日本語母語話者と中国人日本語学習者の「断り」の言語行動を成立させるために使われるポライトネス(丁寧さ)に焦点を当て、中国人日本語学習者が「断り」表現を行なう際、日本語母語話者のように日本語の敬語体系が上手に使えるかどうか、また日本語母語話者と中国人日本語学習者との間には「断り」表現をめぐる言語行動のポライトネス(丁寧さ)の特徴及び基準はどのような共通点及

び相違点があるのかを解明していきたいと思う。

2. 先行研究

2.1 発話行為に関する研究及びその流れ

実際の言語行動生活の中で、場面や状況などに応じた語用論的言語表現形式は社会的、心理的といった様々な要素と絡み合い、簡単に理論で説明しきれものではない。Thomas(1995:25)は語用論を「相互交渉(Interaction)における意味」と定義し、その意味を明らかにするというのは、話し手と聞き手の間の、そして発話の(物理的、社会的、言語的)文脈とその発話の選択可能な意味の間の、意味の取り決めにかかわるダイナミックな過程だと論じている。今までこのような語用論的言語表現がどのような機能を持ち、それがまた現実の人々の言語生活にどのように反映されているかということ視野に入れた様々な分野での先行研究が行われてきた。

2.1.1 対照語用論¹⁾(Contrastive Pragmatics)レベルでの研究

近年、語用論レベルの分野で、発話の言語行為をめぐる「依頼」、「謝罪」、「断り」、「感謝」などの対照語用論研究が盛んに行われてきた。

様々な発話行為に関する先行研究から、異なる社会的文化規範や価値観などによって社会的地位及び心理的要因などに対する言語行動には変化が現れ、したがって言語行動をめぐる異なる言語同士の使用内容も様々な相違点をみせていることが確認された。

2.1.2 中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)レベルでの研究

日本語教育の立場から外国人日本語学習者の「言語転移」²⁾(Language Transfer)に関する中間言語語用論レベルでの研究も様々な分野で行われてきた。特に、近年、来日する中国人留学生の急激な増加により、中国人日本語学習者と日本語母語話者との言語行動におけるギャップを課題にした研究が多くの分野において行われてきた。

数多くの先行研究から、異なる社会的文化規範や価値観をもつ日本語母語話者と日本語学習者との間には様々な言語行動をめぐる発話の選択内容に共通点及び相違点がみられた。外国人日本語学習者にみられる言語行動の問題点は、普段の日本人とのコミュニケーションにおいて、日本人に誤解されやすいマイナス的な働きがあると指摘されている。

2.1.3 発話行為の中心であるポライトネス(丁寧さ)理論

日常言語行動において最も重要なことは、言語表現

が運用される時の発話場面、話し手と聞き手との上下関係及び力関係などといった条件によって、その場や相手人物に対するポライトネス（丁寧さ）を重要視した発話をするのである。

丁寧さ（Politeness）とは何かということ聞かれたら、恐らく相手に失礼にならないように敬意が表された態度や言葉遣いの丁寧さを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。しかし、語用論及び社会言語学における「丁寧さ」の議論は、普段、我々が感じている「丁寧さ」の背後にある原理をもっと幅広く、もっと深く求めようとしているものである。このような「丁寧さ」の問題に対し、小泉（2001:125-126）は次のように述べている。「丁寧さとは単なる表現形式だけの問題ではないことである。敬意を表す言葉を使ったり、形式ばった言葉遣いをしたりする形式的な丁寧さを問題にするだけではなく、相手に対して親愛の情を表したり、仲間である気持を高めたり、それを確認するような、相手を『気持ちよく』感じさせる様々な方策を含んでいる。」

2.1.4 Leech(1983)の丁寧さの原理 (Politeness Principle)

リーチ（1983:189-191）は、ポライトネス（丁寧さ）は依頼、要求、命令など、人に何かをしてもらう場合や、招待、申し出、ほめたり祝ったりすることなど、人に何かをしてあげる場合など社会的な均衡と友好的な関係を維持する機能を持ち、丁寧さの原理 (Politeness Principle) を大原則として気配りの原則、寛大さの原則、是認の原則、謙遜の原則、同意の原則、共感の原則などを主張している。

2.1.5 Grice(1989)の「協調の原則」(Co-operative Principle)と4つの公理

一方、Grice（1989:26-27）は、言語行動において私たちのやりとりを支配している暗黙の一般原則として、「協調の原則」と4つの公理を指摘している。「協調の原則」とは、「会話の段階で、話者が行っているやりとりの共通の目的・方向という点から、要請されるだけの貢献をせよ」ということを指している。Griceは、更に「協調の原則」を「量の公理」、「質の公理」、「関係の公理」、「様態の公理」という「4つの公理」に分けている。

3. 研究方法及び調査概要

井出（1992:42）は話し手の言語選択に関して、「話し手は、言語使用に際して、自らの属性（社会階層、地域、年齢、性、職業、役割など）や相手との関係（上下、親疎）を社会で容認されるカテゴリーに応じて認知し、それに応じた言語形式を選択している。」と述べ

ている。以上のような立場から出発し、本研究での「断り」の発話行為に関わる要素として次のような要素が考えられる。

(a) 話し手 (b) 聞き手 (c) 発話の場面

3.1 話し手（断り手）

本研究で扱っている話し手という概念は断り手の被験者のことを指している。今回は中国の大連、北京及び沈陽に在住している大学生 76 人を対象として調査を行なった。

3.2 聞き手（相手人物）

本研究では、最も幅広い相手人物を視野に入れた範囲内での言語行動の研究を行うため、言語行動の研究に欠かせない社会的関係として、社会における地位的差異（主に上下関係）及び心理的要素（主に親疎関係）を考慮に入れることにし、社会的地位が高い指導教官、心理的距離感が近い親しい友人及び一定の心理的距離感を感じさせる一般友人といった3つの相手人物を設定することにした。

3.3 「断り」表現が行われる発話の場面

全ての言語行動はある決まった場面だけではなく、様々な場面で行われることになる。発話の言語行動を社会的相互行為として捉えた場合、話し手は相手人物によって感じる心理的負担度が違うだけではなく、場面による利益・負担度及び緊急度によっても異なるはずである。よって「断り」表現を含め、相手人物から言い出した用件の内容により、話し手の発話内容はその場面に呼応した物理的・行動的場面により色々と異なってくるのではないかと考えられる。

3.4 調査方法

本研究では、「断り」表現の発話が行なわれる場面を物事の利益・負担度及び緊急度がそれぞれ異なる引越しの「依頼」、先輩の送別会への「誘い」、勉強会への「提案」といった3つの場面に分けて、一度に大量のデータを得るのに適切な筆記形式のアンケート調査方式—談話完成テスト D.C.T(Discourse Completion Test) を用いてアンケート調査を行うことにした。

Q1、あなたは次の a、b、c の人物から引越しの手伝いを依頼されていますが、その日はあいにく用事があるのでどうしても行きません。依頼を断ることで、相手を傷つけない、人間関係を壊したくないあなたの気持ちを考えながら教えてください。

- a 指導教官の依頼に対する断り：
- b とても親しい友人の依頼に対する断り：
- c 一緒に授業を受けていて、挨拶をする程度の友人に対する断り：

Q2、あなたは次のa、b、cの人物から先輩の送別会に誘われましたが、あなたは最近、経済的に苦しいので断りたいと思っています。誘いを断ることで、相手を傷つけない、人間関係を壊したくないあなたの気持ちを考えながら教えてください。

- a 指導教官の誘いに対する断り：
- b とても親しい友人の誘いに対する断り：
- c 一緒に授業を受けていて、挨拶をする程度の友人の誘いに対する断り：

Q3、あなたは次のa、b、cの人物から一緒に勉強会をしようという提案を受けていますが、あなたはその勉強会にあまり興味が無いので断りたいと思っています。せっかくの提案を断ることで、相手を傷つけない、人間関係を壊したくないあなたの気持ちを考えながら教えてください。

- a 指導教官の提案に対する断り：
- b とても親しい友人の提案に対する断り：
- c 一緒に授業を受けていて、挨拶をする程度の友人の提案に対する断り：

3.5 分析方法及び調査結果

先行研究に踏まえ、分析はBeebe et al. (1990) で使用された意味公式 (Semantic Formulas) を修正したものを用いる。「意味公式」とは、発話行為を構成する最小の機能的な意味単位を指す。

中国人日本語学習者の「断り」表現における調査内容を分析した結果、日本語母語話者に誤解されやすい以下のような結果がみられた。

3.5.1 「弁明」の意味公式の多用現象

Goffman (1971:108-118) は、発話を社会的相互行為として捉え、危害を与える者がその危害を容認できる状況に転換する作業を「関係修復作業」(Remedial Work) という。「断り」という言語行動は一種の消極的な行為要求を意味し、相手の「依頼」や「誘い」、「提案」などを断ることによって起こる利益・負担度は、全ての場面に存在すると考えられる。物事の利益・負担度及び上下・親疎関係がそれぞれ異なる場面及び相手人物に対する中国人日本語学習者の「断り」表現には、日本語母語話者にはあまりみられない「弁明の多用現象」が起っている。日本語母語話者の「断り」表現の中にも「弁明」の意味公式の使用はみられるが、普通、その使用率は一回だけに留まっているが、中国人日本語学習者には弁明の意味公式を連発する表現がよくみられる。このような「弁明の多用現象」は日本人に「押しづげがましい、弁明がましい」というマイ

ナス的な印象を与えやすくなるため、中国人日本語学習者が「断り」の言語行動を行なう際には必ず注意すべきだと考えられる。

3.5.2 「断り」表現の発話量が多い

日本人の「断り」表現は、一般的に「詫び」(すみません)、「弁明」(今日はちょっと用事があるので)、「不可」(できません)といった意味公式で行なわれているが、中国人日本語学習者における「断り」表現は日本語母語話者より遙かに発話量が多くなっていることが確認された。過大な発話量は相手に不快感を与える危険性が高くなり、順調なコミュニケーションの目的を目指すためには日本人母語話者の発話量を基準とした発話をしなければならないと思われる。中国人日本語学習者の「断り」表現には常に「共感」(とても行きたいですが)、「弁明」(ちょっと用事があるので)、「弁明」(時間がありません)、「次回の約束」(今度また機会がありましたら呼びください)、「詫び」(すみません)といった日本語母語話者にはあまりみられない様々な意味公式を併用した「断り」表現がみられる。過剰的な発話量を使用した「断り」表現は、グライス (1989) の「量の公理」(あなたの貢献を、やりとりのその場の目的のために必要なだけの情報を与えるようなものし、余分な情報を与えるようなものにするな) と「様態の公理」(不明瞭な、曖昧な言い方を避け、簡潔な、順序のある言い方をせよ) を違反することになる。ゆえに、「断り」表現のような人間関係の不均衡関係が発生しやすい言語行動を行なう際、如何に発話量を調整するかはその言語の特徴を深く理解した上で言語行動を行なう方が最も良いと考えられる。

3.5.3 上下・親疎関係の異なる相手人物に対する言語表現の区別がみられない

日本語母語話者の「断り」表現には上下・親疎関係の異なる相手人物に対する言語表現が異なっている。例えば、「詫び」表現を行なう際、日本語母語話者は普通、目上の指導教官には「申し訳ありません」や「申し訳ございません」といった表現を多くしており、心理的距離感がある指導教官や一般関係の友人には丁寧さを表す「です、ます」体を使っているが、心理的距離感の最も近い親友に対しては丁寧語を使用せず、親しい仲間意識を表す「ため口」表現を使用していることが確認された。より良いコミュニケーションの結果を目指すためには、相手人物との上下・親疎及び力関係などといった要素を考慮に入れた発話をしなければいけないと考えられる。しかし、中国人日本語学習者の「断り」表現は上下・新関係を問わず、あらゆる相手人物に対してほとんどの人が話し手の丁寧な気持ち

を表す「です、ます」体が使用されていることが確認された。

以上の他にも、また様々な問題点がみられた。例えば、日本語母語話者は相手のことを断るとき、はっきり「ちょっとできません」というより「ちょっとできませんが」あるいは「ちょっとできませんけど」といった「断り」表現の文末に濁し現象が現れるが、中国人日本語学習者にはあまりみられなかった。

4. 今後の課題

今回は中国人日本語学習者の「断り」表現だけを調査して分析を行なったが、今後は日本語母語話者にも同じ質問紙で調査を行ない、両者との間にみられる共通点及び相違点を統計学的に分析していきたいと思う。またその内容を更に広い視点で「断り」表現の意味公式の発現頻度、発話量及び構造（プロセス）などをめぐる分析・考察を通じて、日本語母語話者及び中国人日本語学習者の「断り」表現の特徴を指摘していきたいと思う。

注

1) 対照語用論研究とは、異なる言語同士の対照比較研究であり、様々な言語を話す人たちがどのように言語行動を行っているかを研究する応用言語学の一分野である。異文化語用論とも言う。ポライトネスの研究、コミュニケーション能力をより多角的に説明する研究に付随して、注目が集められ、多様な対人関係や文脈において、発話行為、特に依頼、謝罪、断りなどの言語行動を比較する研究が盛んである。詳しい内容は『応用言語学事典』(2003:315)を参照されたい。

2) 「言語転移」(language transfer)というのは、L2 学習の際に、L1 のパターンを使用してしまふ現象を指している。そのパターンが L2 のパターンと同じ場合は「正の転移」となって学習を促進するが、異なる場合は「負の転移」となり学習を妨害するので干渉とも言われる。詳しい内容は『応用言語学事典』(2003:151)を参照されたい。

参考文献

- 井出祥子 1992 「日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用」『言語』Vol. 21-12, 42-53.
- 小泉保 2001 『語用論研究—理論と応用—』研究社
- 高田誠 1993 「語用論と言語の研究」『日本語教育』第 79 号, 11-25.
- 橋本良明 1992 「婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較—9 言語比較調査—」. 『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』No. 1, 107-159.
- 馬場俊臣・禹永愛 1994 「日中両語の断り表現をめぐって」『北海道教育大学(第1部A)』第 45 卷, 第 1 号, 43-54.
- 李威 1999 「日・中・韓母語話者の『断り』行為の対照研究」『日本語教育学会秋季大会予稿集』, 110.
- Beebe, L. M., Takahashi, T. and Uliiss-Welts, R. 1990. "Pragmatic Transfer in ESL Refusals." In *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers. pp.55-73
- Goffman, E. 1971. *Relations in Public*. New York: Harper & Row.
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge MA, Harvard University Press. 清塚邦彦訳 1998 『論理と会話』勁草書房
- Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman. 池上嘉彦・河上誓作訳, 1987 『語用論』紀伊之屋書店
- Thomas, J.A. 1995: *Meaning in Interaction. An Introduction to Pragmatics*. London: Longman 浅羽亮一(監修) 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳 1998 『語用論入門』研究社『応用言語学事典』2003 研究社

ぶん しょうれん／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻
jinwenhao0915@yahoo.co.jp

【指導教員のコメント】

文さんは博士論文において、断り表現の日中対照を行っている。狭い意味の言語面だけでなく、文化的側面の強いテーマであり、一般の日中対照研究の際によく行われる、日本在住の中国語母語話者を被験者とする調査では、日本社会における生活経験の干渉が重大な阻害要素となりうるので、中国において調査をすることが不可欠である。文さんのこの度の海外調査は、その意味で、この研究にとって不可欠であるばかりでなく、きわめて有用であり、文さんは与えられた機会を十分に生かして、複数の大学でアンケート調査を行って、研究を遂行するのに十分なデータを収集した。この調査結果は、文さんの博士論文に生かされるだけでなく、今後他の研究者によっても参照されることになる貴重なものであろう。限られた期間内に複数都市にまたがる 6 箇所もの大学で調査を行ったのは、事前に周到な計画を立て、先方と打ち合わせをしたためであり、今回の調査研究費を十分に活用したものと評価される。

(文教育学部 教授 宮尾 正樹)